

成田さんちのカラーテレビ

オーイ！皆んな元気でやってるか。なんだかんだと言いながら、ついにこのコーナーも12回目を迎えてしまった。ヤングの諸君！飽きずにちゃんと付き合ってくれてるかな？

オレさあ、衛星放送を見ることができ、大画面のカラーテレビがほしくなっちゃって、貯金をはたいて買おうと思ったら「キャッシュカードに残はない」というヤツで「夏のボーナス一括払い」というので、20数万円もする29型のテレビを値切りに値切って、なんと15万円で購入してやった。ところが、この値切り過ぎたのが間違いだったのか、非常に調子が悪い。色が出ないんだよね。1級技能士の成田さんとしては、例え相手がマイクロコンピュータで制御された高級カラーテレビといえども、色が気に入らなければ手動で調節しなければ満足できない。しかし、どうやっても綺麗な「赤」が出ないんだ。「赤」、つまり、レッドになってほしい部分が全て「マゼンタ（紅）」になっちゃうんだよね。

●光の3原色

光の3原色は赤と青紫と緑だろ。そして、我が家のインキテレビで出ない色は赤。な、な、なんと原色の赤が出ないんだよ。インキだろ、このテレビ…。例えば、オレ達が特色のインキをつくることを考えてみてよ。「緑色を出せ」と言われて、藍と黄のインキを混ぜ合わせたら、指定された緑色より少し黄色かったり、青かったりするかも知れないけど、「藍で刷れ」と言うんだったら、原色の藍インキ一発で綺麗な藍が刷れちゃうもんなあ。それをだよ、うちのバカテレビは原色の赤が出ないんだ

ぜ。

カラーテレビってヤツはねえ、赤と青紫と緑がワンセットになって一つのドットを構成し、そのドットが規則正しく画面上に並んでるんだ。そして、テレビのスイッチを入れたときに画面上で白く見える部分は、この3色のドットが同じ強さで全て光っているとき。加法混色ってヤツだね。そんでもって、画面が緑ならばドットの中の赤と青紫を光らなくして緑だけを光らせてやれば良い。青紫や赤だって同じこと。それだけを光らせて、他の色を光らなくすればOK。そんじゃあ、黒は？…簡単、3色とも光らないようにすれば良いだけ。オレ達がやってるカラー印刷は、ほとんど白い紙を使うだろ。そして、カラーの中の白い部分には何もインキが着かないよね。色を重ねれば重ねるほど、黒くってしまう印刷。だから、白い部分には何も色を着けない。これが減法混色。その逆に色を重ねれば重ねるほど白くなるテレビのような光の世界。だから、白くしたい部分には目いっぱい色があふれてる。

●バカテレビの謎

さて、お話を我が家のバカテレビに戻そうか。赤にならなきゃいかんところが紅になってしまう。さっきも言ったように赤は原色だから、3色のドットのうち、赤だけを点灯させれば良い。ところがこれが紅になる。そんじゃ、この紅っていう色は、どんな色かっていうと、光の世界では赤と青紫の混合色なんだよ。つまり、赤のドットだけが光ってれば良いものを、そのときに青紫のドットまでもが点灯してしまうってワケなんだ。だから、赤く見えずに紅に見え

てしまうんだね。…ウーン、この光の混合の話にまで行ってしまうと、チト難しくなり過ぎちゃうね。例えば、赤の光と緑の光を混合すると何色になるか分かるかな？そんじゃあ、緑の光と青紫の光ではどう？ワハハハ…どうだ分かんないだろ！実はパツと言われると天才成田さんでも分かんない。インキの混合だったら、すぐ分かるんだけどね。…てなワケで、こういう難しいことを知るために一番良い書物がある！成田さんが何年も愛読してる、素晴らしい専門誌！これに勝るものはないというくらい、とっても良い本！それこそは！かの有名な！「つるぎ出版社」の「新入社員のための印刷読本」なのだ！ジャジャジャーンと！（ちとヨイショし過ぎちゃったかな）

●オペレータは弱し

さてと、では印刷のバイブル（聖書）とでも言うべき「新入社員のための印刷読本」で光の混合について調べてみましょうね…。オーッさすが！つるぎ出版社。カラーの図解入りで、しっかり載っているじゃあ～りませんか。ナルホド、こうしてカラーの図で見ると一目瞭然ですな。ナニナニ、赤と緑で黄色か。反対色にぐる補色は青紫。そうか、黄色は青紫のフィルターで分解するもんなあ。そして、赤と青紫の混合で藍。緑と青紫で紅か…エエッ！チョット待て！ウソだろ！これは理屈に合わんぞ！そんなバカな…そう！実はこの図、つるぎ出版社さんの大チョンボ！藍と紅の位置を間違えたミスプリントだったのです。しかし、オレは自分自身が情けなかった。この間違った図を見た瞬間「アッなるほどな！」と率直に受け入れてしまったんだよ。そ

ドット
加法混色
減法混色
メタルホワイト

して、じゃあ、うちのバカテレビは何がどうなっているんだろう？と図を見ながら考え出したとき、初めて疑問をもち始めた。考えても考えても理屈に合わないもんだから「ひょっとして、これミスプリントじゃないかな？」と思い、他の書物をあさってみた。そして、ようやくその書物の中で本物の図を見つけて「アア、やっぱりミスプリントだ」と自信をもつことができたという次第なのだ。

実は先日、ウチの社内でもある事件が起こったんだよ。銀色の合成紙の上にメタルホワイトという白インキでベタの部分をつくり、その白ベタの上に墨で文字を乗せるという仕事。「2色機で一回通せばできるだろ」と営業さんが言う。「メタルホワイトは刷ってから一度乾かさないとインキが乗りませんよ」とオレが言ったんだけど信じてくれない。「納期がないんだ！何とかなるだろ！」ってきかないもんだからインキメーカーに電話して専門家に説明してもらったら、やっと「おまえの言う通りらしいな」だった。

本の中の活字や、その道の専門家の力って、すっごく強いね。でも、オレ達オペレータも、もっともっと強くならなくっちゃね。そのためには勉強しかないんだよ。そして、その勉強の第一歩は、この成田さんの雑学集を読むことなのだ！だから次回もきくと読むんだぞ…ナンチャッテ。ところで、ウチのバカテレビは直してもらえるのかなあ…。ではまた！

（1992年2月号掲載）

注：ミスプリントの部分はその後訂正。現在同書は絶版